安養寺（あんようじ）の清め火 ―上野―

鎌倉時代のお話です。

仏通禅師（ぶっつうぜんじ）というたいそうえらい和尚（おしょう）さんがいました。

和尚さんは、どんな日でも外宮と内宮へはお参りに行くという、たいへん信仰心（しんこうしん）の厚い人でした。

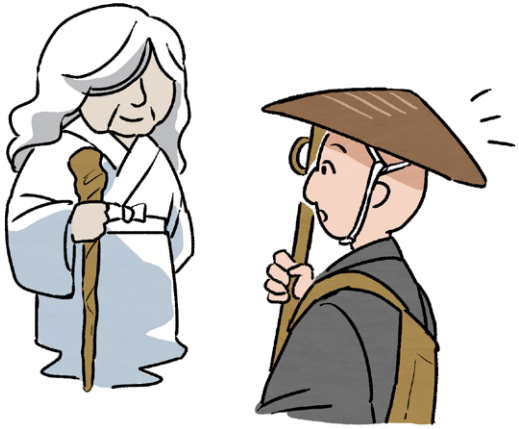
しんしんと雪の降る夜明けのことです。

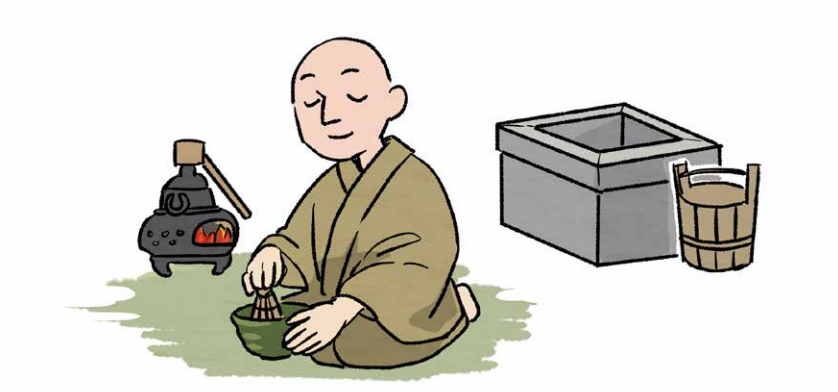
いつものように和尚さんは外宮の参拝を終え、小田橋（現伊勢市岡本町と尾上町の境）を渡って内宮へ向かおうとした時、若い女の人が老人を抱いて泣いている姿が目にうつりました。

和尚さんは驚き「どうしたのですか？」とたずねると、「はい、母が長い間病におかされ、看病のかいもなく息を引き取ってしまいました。私は貧乏でお金もありません。夜が明けぬうちに弔いをしたいと、ここまで母を抱きながらやってきましたが、もう力がつき果て、どうしたらよいか迷っていました。」

と、涙をいっぱいためていうのでした。

和尚さんは女の人がかわいそうになり、「それでは私が力を貸そう。」和尚さんは冷たくなっている死人を墓まで背負っていき、そうして手厚く葬り、念仏をとなえたのでした。





安養寺の境内にある
明星水の井戸

女の人は何度も何度もお礼をいいながら去っていきました。

それからも和尚さんは、毎日両宮への参拝をかかしたことがありませんでした。

ところがある日、いつものように高の宮の坂を通って外宮へ向かおうとした時、一人の老人が現われて、

「私は神です。あなたが毎日両宮へ参拝しているのを見て、それは一人の欲のためかと思い誠の心を試そうと、小田橋のところで死人を抱き助けを求めていたのは私でした。

あなたは誠に心の清い人、そのお礼に信心清浄（しんじんせいじょう）の火をあげよう。」といって去っていきました。

和尚さんの日ごろの行ないが、神に通じたのでした。

そうして和尚さんは、上野に安養寺という立派なお寺を建て、参拝にくるたくさんの人びとに、安養寺清浄の火をほどこしたのでした。そして不思議なことに、そのお寺の回りにきれいな水が湧いたのです。それは神都の地が古くから水と火の清浄を重んじてきた風習にこたえる、貴重な水と火でした。

こうして、参拝する人の身も心も清め、安養寺はたちまち有名になり、参宮街道（さんぐうかいどう）の名所として、訪れる人が絶えなかったということです。

キーワード：上野、安養寺、仏通禅師、伊勢街道、伊勢神宮

この内容は、昭和52 年から広報めいわに連載された野田那智子さんの「まちの民話」を掲載したもので、登場する人物・建物・その他の名称・読み方などは、原文をそのまま使用しています。